

連合赤軍の斗争に 対する我々の態度

1972 3.16

共産主義者同盟 (R.G.)
中央委員会

この国の連合赤軍の暴発、暴動は中々大規模なものであつて、十日間の銃撃戦、その後の二、三回に及ぶ人海戦として政府警察、防衛新聞の二つに暴露された内部事情に於ける一定の事件は、日本警察当局の中心事件として扱われ、それが重視されるのみならず、この一、二つに及ぶ大きな政治的出来事として扱つてゐる。

我々も、連合赤軍の銃撃戦の経過を新聞で見て来た。この間にわたる全警察官の政治的犯行を警察当局の側へて組織し、この間にわたる、この銃撃戦の連合赤軍の組織的規模をこの間にわたるものとして扱つてゐる。我々も、日本の警察当局は、警察の組織的犯行をこの間にわたるものとして扱つてゐる。我々の態度は、連合赤軍の暴発をこの間にわたるものとして扱つてゐる。我々の態度は、連合赤軍の暴発をこの間にわたるものとして扱つてゐる。

() 本々々々 () ... 日本に於ける警察当局は、警察の組織的犯行をこの間にわたるものとして扱つてゐる。我々の態度は、連合赤軍の暴発をこの間にわたるものとして扱つてゐる。我々の態度は、連合赤軍の暴発をこの間にわたるものとして扱つてゐる。

我々の態度は、連合赤軍の暴発をこの間にわたるものとして扱つてゐる。我々の態度は、連合赤軍の暴発をこの間にわたるものとして扱つてゐる。我々の態度は、連合赤軍の暴発をこの間にわたるものとして扱つてゐる。

赤報

一九七二年三月二三日
特別号 (100頁)
共産主義者同盟 (R.G.)

この間の連合赤軍の群馬・長野県山中での大量逮捕から始まって、10日間の銃撃戦、その後
にリンチ殺人事件として政治警察、商業新聞によって暴露された内部粛清に至る一連
の事件は、日本階級斗争の中に、革命戦争を認め、それを實現するかどうかをめぐって、
かきない大きな政治的分裂をつくりだしている。我々は、連合赤軍の銃撃戦の遂行
を断固として支持し、つくりだされた全階級の政治的分裂を革命戦争の側へと
組織し、にもかかわらずこの銃撃戦が連合赤軍の組織的壊滅とひきかえに斗われ
たものであったという赤軍派、日共革命左派神奈川県委員会、党的敗北を、
真剣に総括して、非法法党建設を更に一步前進させるための貴重な糧
としなければならぬ。

連合赤軍の銃撃戦と革命戦争

5人の連合赤軍による山荘への立てこもり、
警察との銃撃戦は、日本階級斗争における
初めての銃撃戦として斗われた。(秩父事件
等は至清斗争)当初から計画されたものでは
なく、追いつまれの銃撃戦であったとは
いえ、10日間を圧倒的に優利な敵に対して
全く沈黙して押し通し、徹底的に非妥協的
に斗い、2名の敵を殺し(1名は才2枝の
隊長)12名の敵に重軽傷を負わせ、日本革命
戦争を大きく前進させた。

追いつまれの銃撃戦だったことにより、連
合赤軍はただ徹底抗戦し、できるだけ長い時
間を稼ぎ、できるだけ多くの敵を殺すこと
によって、できるだけ銃撃戦による階級の影
響を拡大することを遂げた。

彼らの直面していた局面で、この斗いは、
全く正しい斗いであり、武装斗争の戦術的
原則を守るものであった。5人の連合赤軍
の沈着さ、天をも衝く勇敢さ、忍耐強さ、
敵に対する非妥協性を我々は声をあげて
賞讃しなければならぬ。

政治警察の攻撃が連合赤軍をして戦い
を選ぶか、戦わずして倒れるかの岐路に置
いたとき、彼らは戦いを選び、たった5人で
一たとえ人質をとったとはいえ、800人の
警察を相手にして10日間もちこたえ、1
億円の金を支出させたのである。もし彼ら
が戦いを選ばなかったら、連合赤軍の組織
的壊滅というところまで終り、この場合の労
働者階級の意気沮喪、革命的左翼の
混乱は、はるかに大きな不幸を招いたで
あろう。

彼らが斗いを選んだからこそ、労働者階級
は、革命戦争の遂行のための貴重な教訓を
手にすることができたのである。

戦術的教訓としては、市街戦をめぐる敵
訓が多い。手投げ弾、仕掛け爆弾を有
効に使えば、より大きな被害を警察に
対して与えることができるであろう。

現在の警察力の範囲(部会的には自衛
隊、ヘリコプターなど)での敵の対応も非
常に良く明らかになった。だが、何よりも
5人の連合赤軍の敵に対する非妥協性
こそ、彼らが組織的壊滅に近い打撃を
受けたにもかかわらず、階級斗争総体
に深い前進的な影響を与えたので
ある。

昨年春の朝霞自衛官刺殺事件のフ
レームアップ、ツリー爆弾斗争における
通行人の負傷を楯にとつての反過激派
キャンペーンを10日間の銃撃戦は吹き登
はしてしまつた。リンチ殺人事件になる
内部粛清に対する暴露にもかかわら
ず、革命戦争か、侵略、反革命戦争
かをめぐる大きな政治的亀裂が、この
階級斗争の中には、きりとでてしまつ
たのであり、この亀裂は、さらに拡大さ
るを得ないし、拡大していくであろう。

一方では、ロステリ的の反革命的な反
撥、一方では、こいつして10日間も徹底抗
戦できるのか、といったようなデオロキ
Iをもっているのか、という疑問と動
揺、このような全階級の政治的分裂
は、革命と反革命とが双方ともに武
装して、対決しあつ、そのような階級斗
争の局面へとゆくりと着つたり、中間
的立場をとっていた多くの人々の動揺
は、両極に分解し、より分けられていく
であろう。まさに、革命は、大規模な
関与であり、銃撃戦の史物教育によ
つて、労働者階級人民の革命戦争に対
する認識は急速に高められたのである。

日本における革命戦争は、爆弾の使用から、さらに銃火器の使用にむかっている。むかわなくてはならない。階級対立の非和解性はますます深化しており、帝国内義者は一歩一歩アジア侵略、反革命戦争にむかっている。進み、借金奴隷としての労働者階級の憤激はますます強まっている。

この情勢の中では、政治斗争の向是は、革命戦争として考えられなくてはならない。

帝国内義国家権力は、資本家階級が労働者階級を借金奴隷として抑圧してあくための暴力組織であり、労働者階級はこの帝国内義国家権力を暴力革命によって粉砕、破壊、打倒し、プロレタリア階級独裁権力を樹立することによって、賃労働制の止の実現にむかなくてはならない。

労働者階級の革命的暴力こそプロレタリア階級独裁権力の唯一条件である。労働者階級にとりて、革命戦争に決起する以外の道は全くありえないのだ。

我々共産主義者同盟(RG)は、連合赤軍のすべこの教訓を学び、ブルジョアジー、日共、革マルの革命戦争に対する攻撃をはねかえし、連合赤軍を越えて進むであろう。

連合赤軍の党的敗北と 革命戦争の政治路線

連合赤軍は党としては敗北した。彼らは自らのつくりだした階級の影響を組織していく力を失っており、彼らに代わって、我々がその任務を負わなくてはならない。彼らの党的敗北の最大の原因は、彼らが自らの組織路線を「軍から党へ」としたところにある。その結果、日共革命左派は70年には18、71年2、17武器奪取斗争を党の武装としてではなく、「ケリラ型蜂起」「革命戦争」として位置づけ、赤軍派の71年2月現金奪取斗争もまた、党の武装としてではなく、「連統蜂起」「革命戦争」として位置づけられた。

両者の連合はこの帰結として、「鉄砲」そのもの、銃撃戦の遂行そのものを、結局のところ政治的意志統一のカタメにして行われ、統一赤軍結成から新党結成が目指されたのである。

「鉄砲」「銃撃戦」そのものによる政治的意志統一は鉄砲を指導するためには、鉄砲を扱う何々人が「共産主義化」しなければならぬという、一種の「党共産主義の母胎」論を党の立脚点にすることによって基礎づけられた。だが、20数名に
よる多くの人間の山中への結集、共同生活という彼らの組織の方法は、この鉄砲、銃撃戦そのものによる政治的意志統一、
「共産主義化」論が具体化したものなのであり、10数人に対する肅清も、水平主義的傾向に対する規律による斗争の帰結であって、共産主義化論はその思想的、政治的あらわれなのである。
この非合法党建設に対する立場の誤りによって、彼らは政治警察にその所在をつきとめられ、組織破壊に近い打撃を受け、かつ完全黙否を破って政治警察に屈服する転向者までも生み出したのである。

赤軍派の場合、M作戦において、これをのグループの自主的な戦いのイニシアティブというマリゲラ組織論そのままに、中央軍が数軍団に分かれて戦争し、その結果組織としての全体的意志統一が乱れ、バラバラになり、以降、中央軍主流派と革命戦線、もつる社の3つに分かれた党内斗争が形成されていた。赤軍派主派(中央軍)はこの分権主義の欠陥を彼らなりに総括し、中央軍をよつに集中し、かつ赤軍派の全組織を中央軍に集中し、連合赤軍から統一赤軍に集中することによって組織改組をはかろうとしていたように思える。

だがこの「集中」は、我々が実現しつつある非合法党における中央集権主義にならざるものではなく、むしろ分権主義の裏返しとしての水平主義であり、山中における多数の結集、共同生活、「共産主義化」論を導いた。日共革命左派の場合、「解放の旗」18号において「行動的軍」から「鉄砲を指導する軍隊」「鉄砲を指導する党建設」への転躍を唱え、武器奪取斗争以降の党内斗争を一応締めくくり、組織再建に入っていたが、彼らの場合、「鉄砲から国家が生まれる」「革命の勝利の着は2000米以内で決まる」という毛沢東の言葉

を言葉通り受け取って、(実際はこれらの言葉は、前者は暴力革命を主張し、後者は唯武器論に反対して持久戦を主張しているのだから)党建設のカナメを鉄砲そのものにおき、今回の〇作戦を主要に構い、赤軍派主流派(中央軍)をこの路線の下にひきつけた。彼らは武器奪取斗争以降、党と軍の分離をはかろうとしたが、できず、結局組織全体が地下活動に入ったといわれている。

革命戦争を遂行する以上、党が非合法党でなくてはならないのは当然であって、問題は党と軍を分離して考えるのではなく、政治局、軍事委員会として指導の中央軍権主義を實現し、運動の技能の専門化をはかっていくことである。日共革命左派はスターリン主義党組織の未克服のために、非合法党建設におけるマルクス・レーニン主義の継承の観点を欠落させ、党建設のカナメを鉄砲そのものにおくという迷路に入り込み、連合赤軍から統一赤軍、新党結成を展望したのであり、当然にも、赤軍派の分権主義、水平主義を克服することができず、このことは政治警察に対する組織的敗北につながったのである。

暴力革命、世界単一のプロレ

鉄砲を扱うこと、あるいは銃撃戦を遂行すること、そのものを党建設のカナメに置くことはできない。日本における革命戦争が爆弾の使用から、さらに銃火器の使用にむかっているし、むかわなくてはならないことは事実であり、正しい。また、鉄砲を扱うことが、党組織の復を飛躍的に変えるということも事実であり、正しい。しかし、問題は、日本における革命戦争が爆弾から爆弾のみでなく、銃器の使用にむかっているし、むかわなくてはならないとしたら、そのような戦術面での飛躍を基礎としている現在の階級対立の非和解の深化を、我々がどのような政治路線によって非合法党の建設のさらなる発展に結びつけていくかということなのである。この問題は、何々の階級政策の問題として考えるのではなく、何よりも現在の帝國主義国家権力に対する態度と、我々が樹立すべきプロレタリア独裁権力の向題として考えなくてはならない。暴力革命、世界単一のプロレタリア独裁権力の樹立、共産主義革命というのである。だが、連合赤軍結成は日共革命左派の中

國共産党を支持、反米愛國、民族解放民主主義革命、人民民主主義独裁という政治路線と、赤軍派の〇LAS路線(世界党、世界赤軍、世界プロレタリア革命戦争)と、日帝打倒、社会主義革命、プロレタリア独裁という当初の政治路線とが党派斗争によって止揚された。一定の戦術協定として結成されたのではなく、「連合軍派統一赤軍派新党」とされ、口際非合法党建設の路線からますます遠ざかり、「革命の根本向題としての権力向題」についての解答を「鉄砲を扱う何々人の共産主義化」論におきかえて、今回の〇作戦の計画に至ったのであった。

商業新聞の報道によれば、今回の〇作戦の計画の中で、連合赤軍は統一赤軍結成から更に新党結成に踏み切った。たようであるが、党的対立を鉄砲そのもの銃撃戦そのものによる政治的意志統一に解消した。この新党は、「鉄砲を扱う何々人の共産主義化」論と、その結果としての規模による水平主義と、斗争とにより、かつて團結することになり、かつ20数名の多数の人間の山中への結集と共同生活という組織の方法を道徳と秘密活動にありて決定的弱点を持った組織として結成されたのである。

非合法党建設の正しい観念に立ったなら、〇作戦そのものも、もっとより計画的に秘密を維持して、現在の階級斗争の具體的局面に見合せて、かつ現在の国際国内党派斗争の再編の局面によりはつきりと答えるものとして練り上げるべきであったはずだが、連合赤軍はこの点で大きくつまずかざるをえなかったのである。

鉄砲による統一と

「共産主義化」論

中南米、ベトナム、キューバとは異って、寒い冬があり、かつ明治維新による上からの資本主義化、オニ次大戦後の戦領軍による農地改革が行われ、封建的所産制の打破を目的とした土地革命を軸として農民と結合することが戦略化しえない日本では、山岳ゲリラが根拠地を移動して一年中を過ごすことができず、多動日本に無理があり、敵に所在をつき

とめられないでいることが困難である。いったん手がかりを発見されるや、いもずる式に逮捕され、かつ交通の便が悪く、都市よりも人目につかず、いいことにより、警官戒網を張りけるとなかなか突破しにくい。決して都市より安全とはいえないのである。

だから、山中訓練はありうるし、秘密を維持して行われなければならないが、あくまでも都市戦争、都市での非合法組織の建設を中心において位置づけられなくてはならない。現在の政治警察の攻撃が我々の都市からの追い出し作戦（アパート・ローラーその他）としてかけられているかぎりにおいて、かつ労働者階級との結びつきからしても、我々は都市における非合法党建設に執着しなければならぬのである。都市における非合法党建設を軸として考えた場合、連合赤軍の作戦もより異なったふうな計画されたはずである。

この場合、指導の中央集権化と党に対する責任の分散化（軍内化）は必須条件である。等々、ところが連合赤軍は、ほぼ全員が山中の一角所に結集してしまつた。なせ子供までも一語にして、多数が結集して、共同生活したのかは、彼らの「軍から党へ」という考え方が、山中訓練といえ、ゲリラ根拠地を求める志向を注みだしたことに、おぼろぐも示されており、かつ「銃砲を扱う何々人の共産主義化論」水平主義におぼろぐも示している。

更に、政治警察の攻撃に対して無意識的に一歩後退して、秘密活動の軸を山岳におこうとしたことにも示している（都市には、革命戦争もぶる社など、赤軍派内の反対派が残っており、赤軍派主流派は中央軍はこれらの部分を政治的、組織的に解体しきることができず、銃撃戦の遂行という戦術による解体しようとしたのである）だが、ほぼ全員が山中の一角所に結集したことは、先にも述べたように、日本の場合、山岳では秘密の維持に大きな困難があるにもかかわらず、それを克服する組織的保障を準備しないことになつたのであり、いったん意見の対立が非和解的に形成されたり、スバイの存在の疑いが出てきたり、規律が乱れ、脱落者が出てきたりすると、そのような部分を単に除名、組織からの放逐といふかたちで処分した場合には、秘密を防止できない。

何れにしても組織を維持し、銃撃戦を遂行しようとするならば、

活という組織の方法をとるかかりにおいて、連合赤軍指導部が、脱落者、反対者を一人残らず殺していかなければならなかったとしても、それは全く当然の帰結なのである。

更にこのことは「共産主義化」論からも基礎づけられた。すなわち、銃撃戦の遂行そのものを目的として結集した連合赤軍は、政治目的を明確にすることによって意志統一して、銃撃戦を行うという考案方ではなかつた。むしろ、勢い「死」を抽象化して考へ、銃砲を扱う何々人が「共産主義化」することによって「死」の恐怖を克服した人間になりうると考へた。そして「共産主義化」の度合いをはかていく基準は、極端な規律・厳守に求められ、何々人が規律を守りうる人間になることが、何々人の「共産主義化」であると考へられたのである。

「共産主義化」論は、革マル派の「党とは永遠の今」という観念論とは質を異にしており、党規律、軍紀に煮つまることろの、非常に具体的、実践的性格をもっているのである。そしてもう一方では、ゲリラ根拠地を求める志向ともあいまって、「共産主義化」論は共同生活の美化と結合している。

共産主義社会における、あるべき親子関係、男女関係その他を、規律を軸にして形成しようという思想傾向が、やはり「死」を抽象化して考へることと結びついていふ。このように、水平主義と個人主義とが裏返しに結合した「共産主義化」論からは、規律に不満を言ったり、この規律を守らない者は、「共産主義化」できない人間であり、「共産主義化」しようとしていない人間であるから全くの反革命であるとして一人残らず断罪されていく傾向が必ず発生する。だが、水平主義は、このことによつては克服しえず、さうに共同生活の美化が誤りであり、かえつて規律の乱れをつくりだす組織的基礎となつたこと、〇作戦のような戦いを控えていることによつて、この規律の乱れや脱落者の形成は連合赤軍の死活問題であり、「共産主義化」論からした場合、連合赤軍指導部が内部粛清を殺害といふかたちで行なつたとしても、それは全く当然の

帰結だったのである。

問題は、なぜ次から次へと脱落者を出さざるをえなかったのか、なぜ大量逮捕の後に完全黙否が破られ、転向者が出てくるのかというところにあり、組織防犯の観点から行なうたはずの処分が、組織防犯につながっていないことにある。

すなわち、鉄砲そのものによる政治的意志統一、共産主義化論、規律による水平主義の克服として意志統一した団結という団結の仕方が誤りであり、無理の多いものであること、党内斗争の徹底した組織化によって政治的対立を止揚し、団結を固め直していくことができなかったのである。

スパイ問題と共産主義者の党

スパイ問題はとして宣伝されていることに關しては我々は少しの情報しか持ちあわせていないが、連合赤軍の内部共謀はむしろ、動搖した者脱落者に対する組織防犯の観点から、処分であるようである。○作戦のような戦いに直面しているとき、スパイを発見して殺すのは全く正しい。また、スパイでなくとも敵との戦いに入っている際の敵前逃亡者は銃殺しなければならぬ。このような処分の基準は、一つには党組織がブルジョワ国家権力との関係でどれほどの危険にさらされているかの度合によって決まる。

だが、最も問題は、スパイをすべて殺すことではない。スパイがいても組織が防犯でき、秘密を維持でき、かつスパイを摘発しうる組織」ということであり、このことは何よりも党内斗争の徹底した組織化によって、様々の政治的傾向というあいまいな階級的観点をより分けうること、敵性論理とそうでないものを区別しうることである。

指導の中央集権制党に対する責任の専門化、党内情報のみまない組織化を我々共産主義者同盟(R.G.)が、重要な規約問題、規律問題としてしているのもそのためである。だが、連合赤軍は「鉄砲」を美化することによって、そもそもの非合法党組織の建設から離れて共同生活し、政治的意志統一を「共産主義化」に求めたために、規律を守っていれば、党内斗争は起りえないということになり、実際は党内斗争を組織しうるということ自体、重要な規律

問題なのだ(か)脱落者が、組織のどのような弱点にもとずいて形成されるのかを総括する組織的保障を持ち得ず、敵性論理を持ちこんでいるものと、そうでないものとを区別して処分し、動搖する者を教育し、再び団結を固めていくことができなかったのである。

「共産主義化」という考え方は、資本主義社会という基礎の上に立って共産主義的人間関係の成立をとき、そしてその実体を規律に求めることになるのだが、このような思想は資本主義を美化している。共産主義運動は、現に存在するブルジョアジーとプロレタリアートの非和解的な階級対立から出発して、賃労制、私有財産制を廃絶することを目的とするのである。党の団結は、この目的にそって、現にある階級対立の非和解性の具體的發展段階に即して、打ち固められなければならない。階級斗争は必ず党の中に反映するのであり、革命党は党内斗争による、何かプロレタリアートの全体的利益を最も良く実現する道なのかを不断に明らかにし、自らを純化する能力を持たなければならぬのである。

連合赤軍の教訓と遺産と 革命戦争と非合法党の発展

連合赤軍の組織的破産は、こうして、その「軍から党へ」とした出生の秘密から現定されて、余りにも純粋に、鉄砲そのものを意志統一のカナメとした新党結成、「共産主義化」論、内部粛清、大量捕に至った。彼らはその分権主義、水平主義、経営細則論の未克服などからして、非合法活動に何々人がすべれていること、何々の技術がすべれていることがあったとしても、非合法活動を組織としてとりあつかって、経験を蓄積し、継承性を保ち、発展させていくことにおいては未熟であった。連合赤軍が革命とは縁もゆかりもないとか、ファシストだとか、スターリニストだとかいう人々、内部粛清は誤りであるから、銃撃戦とか革命戦争を考へることも誤っているのだという人々はすべて誤りであり、ブルジョアジーの反共攻撃に荷担しているか、あるいは屈服している。

反革命——日本共産党

日本共産党は、必要に迫られてマルシアニシエのソビエト上層を倒して、國共連合赤軍のソビエト主義という形式を打ち出すことについて、ソビエト戦争不能論を批判して中国共産党を擁護するものとして攻撃し、ソビエト連合赤軍はマルシアニシエから排除されるべきにシエニシエによる「革命的左翼」に対する派手な攻撃「革命的左翼」の上で、マルシアニシエの所を右打ち、革命の左翼に対するマルシアニシエの弾圧を促かしている。マルシアニシエはソビエト派を山出ている。日本共産党は、彼等こそ、階級戦争を反政府共産党の枠におし込め、革命戦争の発展を阻止するための任務を、マルシアニシエによって、まかされ、マルシアニシエによって、身の安全を保障されているのだ。

マルシアニシエと共に連合赤軍キャンペーンに狂信している彼等こそ、革命以外は何物もなかり、革命戦争の過程で、マルシアニシエと共に、ソビエト階級は全力をこめて闘い打ち倒さねばならない対象である。スターリン主義といつのは、彼等のことを云うのであり、ソビエト共産党の国際的、全体的利益を裏切つて、帝國主義の國際反革命戦争大軍に屈辱し、過渡期を男の階級戦争から、女男共産党、古男共産党のソビエト共産党をめざす、女男革命戦争へと発展することを、ソビエト帝國主義者と共に、ソビエトから反對する。民族共産主義、連邦共産主義者のことを云うのである。彼らは、革命戦争、暴力革命に對して、マルシアニシエに、女男共産党を感づいている。彼等の「人」は、戦争不能論批判に對して、我々の言ふやうな、ソビエト共産党の、労働

者階級は革命戦争に決起しないかあり、絶對に資金奴隷としての自らの解放に向つて先をたすことはできない。革命戦争のみが、勝利の道なのだ。

ソビエト共産党の動搖

革命マルシェと革命協会は再び結婚した。根、ソビエトの連合主義者としての彼らは、マルシアニシエの反共攻撃と、日本の革命キャンペーンに屈服し、客観的に有利に動いている。

日共派は一万人銃撃戦支持の態度表明をし、赤色救援会主催の集會に忠清派と共に参加した。しかし、この部分に、すくなくとも、社内内閣清に對する自己批判声明を出しているのに、見られるように、動搖せざるを得ないだろう。

非法法堂建設についての何の路線も持たず、情勢が良くなれば革命戦争に賛成し、情勢が少し不利になれば、「武器をとりなげればよかつた」といふような、ソビエト人々には、革命の創につくのか、反革命の創につくのか、我々の創につくのか、マルシアニシエ曰く、革命の創につくのか、態度をはっきりさせなくてはならない。結局、彼等の合法的組織は、ソビエト共産党の批判と並列させ、切り離して述べている点で、彼らの地下正統軍なるもの、実は、スターリン主義者の鏡を、ソビエト共産党の組織の拡大のため、道具として、ソビエト共産党に位置づけられている。

半後派は、女共産党である。彼らは、ソビエト共産党の

では革命戦争に向って進もうという衝動はなからなから、自らの党建設の全面的総括を行わねばならないことはいくらもわかって居る。そして、その第一は、日共、革マル、青解の反革命的合唱に耳を借って動揺して居る。二つ目として彼らは大衆の自覚、発覚性にくたくく密着して運動したる、当面は刃先を身することを目指して居るのがある。だから、現在の階級訂立の非和解性の素化は、彼等をして早晩、革命戦争を遂行するかどうかのため、水道に立たせざるに違いない。

革命戦争の勝利への道

我々の前途は、二つして全く洋々として居る。我々のみならずこの全階級の労働者の中、マルシヨアジール、日共、革マルに決定して革命戦争の道を指し、手しまた、實際に進むことかある。

このことは日本革命戦争の未来は全く明るいことをも示しているのである。『冬』の時代いなどという言葉は急進民主主義者、革命戦争に對して動揺しているもの、合法主義者のいうことである。

労働者階級、我々のマルシヨアジールに對する知りと憎み外は、と、まるところを知らず、にまるところを、擲棄して居る。

この階級的横断の波は、必ず、革命戦争の大波にまで高まるとわかって居る。

我々の共産主義者同盟(日共)は、連合共軍を越えて進む。

我々は、断平として非合法の党建設を第一進め、革命戦争の勝利を争い、つてやめてやめよう。

1972年3月1日の日

共産主義者同盟(日共)中央委員会